



月刊 島民

中之島

橋を渡る人の「街事情」マガジン

祝開業! 中之島 フェスティバルタワーへ 行こう。

Vol.52 2012 11/1

●iPadサイズ(と、ほぼ同じ)

ナカノシマ大学
「新しいランドマークを
つくる 中之島フェスティバルタワー」
建設秘話
岡橋 稔
(竹中工務店大阪本店)
申し込み受付中!

月刊島民 中之島 52号 2012年11月1日発行 編集・発行人 江弘毅(140B) 編集・発行 月刊島民プレス 〒5300004 大阪府北区堂島浜2-1-29 吉河大阪ビル4階 定価0円 Printed in Japan

こころまち つくろう
KEIHAN
京阪電車



ひとりじめは、もったいない。

桶井けい子(大生) 圓光寺

おけいはん、 紅葉に恋をした

いまだけの秋色を追いかけて、京阪電車にのって。

京阪沿線の紅葉名所 三千院、実相院、貴船神社、もみじのトンネル(叡山電車)、八瀬、圓光寺、北野天満宮、法然院、真如堂、南禅寺、青蓮院、高台寺、泉涌寺、毘沙門堂、醍醐寺、三室戸寺、善法律寺、男山、常寂光寺、渡月橋付近、比叡山延暦寺、日吉大社、三井寺、石山寺

※紅葉めぐりに「便利でお得なチケット」発売!
※ノンストップ京阪特急「洛楽」運転!(11/3~12/2までのすべての土・日曜、祝日)

お問い合わせ 京阪電車お客さまセンター Tel.06-6945-4560(9時~19時 ※土・日曜、祝日は17時まで)



お京
けい
はん
の
は
ん。
www.okeihan.net

※詳しくは、ホームページまたは京阪電車主要駅で配布中のKPRESS 秋の増刊号「京阪沿線の紅葉」をご覧ください。

「この建物の最大の特徴は、大空間のホールの上に超高層オフィスを積み上げてことです」と話すのは、設計・監理を手がけた日建設計の岡田健さん。超高層ビルに建て替えつつ、歴史あるフェスティバルホールを継承するために現れた難題が、超高層ビルの下部にホールを設置するというもの。2700席のホールの本体部分は4階から8階にまたがる大空間で、内部に柱がない。この上にオフィスを20層以上も積み上げなくてはならない。

① メガトラス

ている。メガトラスはSA440とい

部分と同じくらいだ。

床まで高さ約20cmを貫く。計2本のフ
レース（斜材）や水平材からなる。こ
れらは15階から上の高層階の重力を受
け、下層の外周部へと流す役割を持つ

ツリーの主な鉄骨にも使われており、一般的な鉄骨用鋼材の約1・5倍の強度を持つ。最大の板厚は100mmで、これも東京スカイツリーの一番分厚い

「メカトロニクス」の溶接工も東京スカイツリーと共通しているんです。施工を手がけた竹中工務店の岡橋稔さんが証言する。現場溶接を手がけた溶接工は、特別なテストをクリアした腕利き

ばかり46人。特に難しいのが斜めに取り付く鋼材同士の溶接で、さらに難しいテストをクリアした方が担当。うち10人は東京スカイツリーの円形の鋼管の溶接経験者だったという。「現場溶接の痕は削ってなめらかにしようという案もあったのですが、建築主の朝日新聞社から『がんばった証拠を残してはどうか』という意見をいただき、残すことになったんです」と前述の岡田さん。溶接工のがんばり、ぜひ目で見て確認を！

溶接痕は1本の幅が6mmほど。メガ
トラス1箇所を接合するために重ね
た溶接は100周以上。気が遠くなる。

だから、すごい！

中之島
建築学。
フエス
ティ
バル
タ
ワ
ー
の

11/28
オープン!

メガトラス
↓

き86mの杭
↓

11/28
オープン!

① メガトラス

④ ハットトラス

③ オフィスフロア

2 中間層免震

5 22万個のレンガ

⑥ 深さ86mの杭

中之島フェスティバルタワーはすごい……。

高さ200mの超高層ビルというのはそれほど珍しくはないはずだが、果たして何がすごいのか？ 完成直前のタワーにお邪魔して、設計や工事に関わった方に、構造的なスゴさや工事の難しさを教えていただいたすると地下からてっぺんまで、投入された技術と涙ぐましい努力のあとが多数。大技から小技までさまざまなネタが詰まっていることが判明！ 誌面では紹介しきれないほどの技のてんこ盛りなのだが、部位ごとにダイジェストで紹介してみよう。

文／平塚桂（ぼむ企画）

たかきみ江とのコンビによる、建築ライターユニット「ぼも企画」のメンバー「Casa BRUTUS」など建築専門誌のほか一般誌でも多数執筆。月刊島民でも、橋の見方を解説した連載などでおなじみ。「東京スカイツリーの科学」(ソフトバンク)新書では、注目を浴びる建築の構造をイラスト入りで分かりやすく紹介

2 中間層免震

もう一つの大技が「中間層免震」だ。免震とは、地盤と建物の間に震動を吸収する装置を入れて、地震力をなるべく受けないようにする構造だ。通常の免震層は、建物の一番下につくられる。

ここでは鉄骨鉄筋コンクリート造から鉄骨造に構造形式が切り替わる、ホールとオフィスの境界に免震層を置く中間層免震が採用された。

この免震層、前述のメガトラスに集



1本あたり6,000tの重力に耐えられる、日本最大級の免震装置。
免震層はフェスティバルホールと中間層オフィスの間に。

またた巨大な力を支える必要がある。メガトラスを受ける建物外周16本の太い柱（大臣柱）は1本あたり6000tの長期荷重を支持する。東京タワーに使用されている鉄骨の総重量が3600tというから、その重力の巨大さがわかるだろう。「市販の免震装置の最大が1辺1・6mですが、ここでは次に大きな1・5m角のものを大臣柱1本あたりに2個ずつ使用しました」と岡田さん。大臣柱に設置された免震装置は日本最大級だ。



メガトラスが間近で見られる13階スカイロビーは必見。



溶接痕は1本の幅が6mmほど。メガ
トラス1箇所を接合するために重ね
た溶接は100周以上。気が遠くなる。



**デザイナー・
森田恭通さんが語る**

「ラ・フェット ひらまつ」の 「大阪イズム」。

フェスティバルタワー最上階に入るのは、
関西初出店で注目される「ラ・フェット ひらまつ」。
その設計を手がけた森田恭通氏に、
デザインのポイントについて聞いた。



総料理長の平松宏之さんから今回のお話をいただいたのは3年ほど前。関西に初めて出店するというので、いい緊張感をもって仕事をすることができました。

お店は2つの部屋に分かれています。僕のデザインは照明がポイントになることが多いんですが、今回もそう。北側の方はイチヨウの木を使用したタワーのような照明を、南側の方には素材に銅を使用したシャンデリアがあります。どちらも「大阪らしいもの」という僕なりのアイデアです。同じ最上階には「フェスティバルスイート」というカンファレンスルームもあり、パーティーのほか、会議などの際にも使われます。パーティーと会議、両方に堪えられるデザインというのは難しかったですね（笑）。

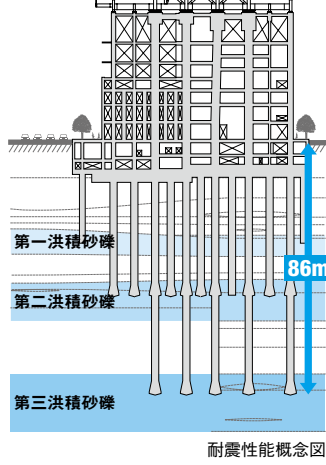
フェスティバルタワーができることで人の流れは確実に変わるでしょう。その一番上ですから、大阪ならではの、かつ「ひらまつ」らしい華やかさのあるデザインを意識しました。迫力があって、どこかクスクスと笑える遊び心もある。「なんでこんなに照明大きいねん」とかね（笑）。そんな風に突っ込んでもらってもいいですよ。

もりた・やすみち 1967年大阪生まれ。GLAMOROUS co., Ltd.代表。2001年の香港プロジェクトを皮切りに、ニューヨーク、ロンドン、上海など海外へも活躍の場を広げ、インテリアに限らず、グラフィックやプロダクトといった幅広い創作活動を行なっている。2011年にはプロダクトデザイン会社「code」も設立。

©「ラ・フェット ひらまつ」のホームページは
<http://www.hiramatsu.jp/lafeite/>

中之島の工事ということで気になるのが、川に挟まれた地盤にどう超高層ビルを建てるのかということだ。果たして杭はどんなもの？

「深さ86mの杭を使っているんです
が、現場で掘ってコンクリートを打ち



耐震性能概念図

6 深さ86mの杭

地面の下も日本二クラス。

込む杭としては大阪では最も深い。たぶん私の知る限りでは日本一深いと言えます」と岡橋さん。その杭は地下32・5mの第一洪積砂礫層（支持層）を越え、52mの第二洪積砂礫層も越えた、第三洪積砂礫層まで到達。

さらに杭の下部や中間部を末広がりにすることで、支持する力を増している。

「深い杭は掘る時に時間をかけ過ぎると周りが崩れてくるので、24時間施工でした。延々掘り続けても約3日間かかるんです」。

東京スカイツリーの杭の50mより36mも深い、日本一深い

かもしれない杭が、高さ200mの建

物を支えている。



まとめ 中之島の誇りとなるように。

実は「中之島の『等』地だから」と工事関係者に徹底したのが服装やマナー。「現場で着替えられるようにシャワー室を用意し、きちんとした服装で通勤するように言っていました。中之島という地で作業するに恥じない仕事をしましょう、ということなんです」と岡橋さんは振り返る。「工事中の足場シートもどうやって張ったのかと驚かれるくらいピンと張っていました」。

中之島の誇りとなるビルを生み出すために、プロセスから抜かりなく養われてきた品格。その心意気もたずまいに表れているのではないだろうか。



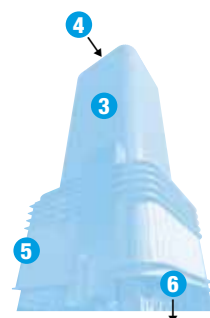
レンガはホール階の外装のほか、ホール内部にもふんだんに使われている。

15階からのオフィスフロアは建物外周から約15mが無柱で、天井高が3m、820坪もの面積を正方形に近い形で持つ。ハイグレードなこの好条件からさまざまなオフィスビル開発が進む大阪でも、完成前からかなりの人気を集めているそうだ。

3 オフィスフロア

柱の無い空間を。

ところで、オフィスビルでは珍しく、四隅が丸くなっている。これにはどういう意図が？ 岡田さん曰く「朝日ビルや朝日新聞ビルなど、これまでの朝日新聞社のビルと、共通するデザインとして取り入れました」。カド丸は朝日建築のDNAなのである。



天井高3mの広々とした無柱オフィス。カド丸は、朝日ビル、朝日新聞ビルとも共通。

オフィス部分の構造形式は、フロア中央部に9本並ぶCFT（コンクリートを鋼管に充填したもの）の柱によるコアと、外周面に1・8mピッチで並ぶ、繊細なH型鋼による「ラーメン構造」のフレームを大梁でつないだもの。そして各フロアのコアに「制振ダンパー」を、屋上には「ハットトラス」という建物全体の曲げ変形を抑制する構造体を設置。中間層免震に加え、さらなる耐震性能が追求されている。

4 ハットトラス

最上部でもがっちりホールド。



上／ラーメン構造とは柱と梁が一体化した構造のこと。短いピッチでフレームをつなぐことで、垂直方向にシャープなデザインを実現。下／屋上に隠されたハットトラスで構造性能がアップ。



5 22万個のレンガ

手作業で積み上げました。



フェスティバルタワーの登場により、
中之島にはなかった新しい過ごし方、働き方が生まれる。
新天地への意気込みや、また建設に関わった人たちに、
そこに注いだ思いを語ってもらいたい。

フェスティバルタワーにかける思い。

取材・文／大迫 力（本誌）

旧フェスティバルホールから、 中之島のシンボルを受け継ぐ。

大塚オーミ陶業
小松 純さん

南側の壁面を飾る「牧神、音楽を楽しむ図」。鮮やかに壁面を彩る陶製のレリーフの再制作を手がけたのが大塚オーミ陶業。小松さんは業務受注前の現場見学会にも参加し、最前線で活躍した一人だ。

実作業には多くの苦労があったが、他の工事関係者との調整にも気を使った。実はレリーフの裏側には金具が付いており、そこに接続したボルトを外装レンガの奥の建築とつなげることで安全性を高めている。そのため躯体や外装工事を行う作業者との区分調整が必要となったのだ。素材となる粘土の管理にも悩まされた。「工場のある信楽は夏は暑く、冬はとにかく寒い。粘土は一度凍ったりするともう使えない。工期が2年にもわたったため、本当に気を使いました」。

工事が終わった今年3月、施主の朝日新聞社の提案で粋な計らいがあった。監修者の建島朔弥氏が中之島へ来る際、淀屋橋で小松さんたちと待ち合わせ、タワーを見上げながら歩いて向かうことにしたのだ。「淀屋橋の真ん中から眺めるのが好きなんです」。小松さんが一番気に入っている風景だ。



大塚オーミ陶業

建築を飾る陶製の大形作品やテラコッタの制作を多数手がける。小松さん曰く「日本を代表する彫刻界のスーパースター」の建島覚造氏（監修者・建島朔弥氏の父）の作品とあり、全社一丸となって取り組んだ。制作の様子は同社のウェブサイトに詳しく紹介されている。
http://www.ohmi.co.jp/report/nakanoshima_festival/



中之島では初めてとなる、 本格的ビル内保育所を開設。

アルファコーポレーション
中城哲也さん

音楽ホール、飲食店、オフィスなどが入るフェスティバルタワーには、意外な施設も開設される。中之島ではもちろん、関西でも初となるオフィスビル内保育所だ。生後3ヶ月から小学校に入るまでの子供たちが入園することができ、ビルの中とは言え給食もその場で手づくりする本格的な保育所。また、食事やホールでのコンサートなどのために訪れた際に、一時預かりを頼むこともできる。

それにしても、オフィス街という印象が強い中之島は、子供たちにとってはどんな環境なのだろう。「お散歩コースの下見のために歩きましたが、緑が多くて良いですね。鞆公園をはじめ近所に公園もたくさんありますし、川沿いには遊歩道もある。船が通るのを見られるのは、子供たちには嬉しいかもしれませんね」と中城さんは話す。

年々ニーズを増すこうした事業所内保育所は、働く側・雇用する側は当然ながら、ビル側にとってもテナントリーシングの面でプラスになる場合があるそうだ。細やかなサービスのおかげで、小さな島民が増えるかもしれない。

キッズスクウェア

フェスティバルタワーの2階。来年3月のオープン控え、現在準備の真っ最中。月極保育や一時預かりのほか、英語をはじめとした幼児教室も開かれる予定。問い合わせは運営を行うアルファコーポレーションまで。
☎075-212-7555



自転車によって生まれる 新しいライフスタイルを紹介。

OVE中之島 店長
白石博昭さん

1階南側にオープンする「OVE中之島」が力を入れているのは自転車。ただし、自転車を売るショップというわけではない。ライフスタイルや好みに応じて自転車のタイプを紹介してくれるコンシェルジュが常駐し、約300冊のライブラリーをソファでゆっくり眺められる。また、「良いものを長く使ってほしい」というコンセプトに沿った漆器や文房具なども揃う。「自転車も展示しますが、例えば写真や建築、カフェなど一人一人の好きなものに自転車がプラスされることで、さらに生活が魅力的になることを知ってもらえれば」と店長・白石さん。自転車を中心として、新しい生活の楽しみ方を発見してもらうための情報発信スペース兼ショップなのだ。

その一環として、こちらで提案するのが「散走」だ。目的地を目指すだけでなく、散歩のように気軽に楽しむというもので、「中之島なら、橋を見て回る散走などが良いかもしれませんね」。実はこの店を運営するのは自転車部品メーカーのシマノ。一つのイメージに染まっていない中之島は、新しいカルチャーを発信するにはちょうど良かったのだそうだ。



ライフクリエーションスペース OVE中之島

11月28日、ビルの開業と共にオープン。東京・南青山に次ぐ2店舗目、関西では初出店。中之島での「散走」は年内にはスタートする予定。お店についてはホームページが詳しい。
<http://www.ove-web.com/>

自転車にも乗りやすい「SASSOH」のジャケット&パンツ。ストレッチ素材で、撥水性も高い。下は東京での散走の様子。



「今日の完成は明日の未完成」。 初代シェフの教えを、現代的な解釈で。

レストランアラスカ グランシェフ
永山康史さん

昭和6年（1931）の竣工と共に店を構えた朝日ビルを離れ、フェスティバルタワー2階にオープンする「アラスカ」。「うちはフレンチでもイタリアンでもなく、あくまでも『西洋料理、なんです。初代の飯田進三郎が日本に紹介した食べることを楽しむ文化を、現代的な形で届けていきたい』と、新たな舞台でグランシェフを務める永山さんは話す。

「今日の完成は明日の未完成」が口癖だったという飯田は、客の食べたい料理を作るために厨房を飛び出し、リクエストを聞いてまた走って戻るような料理人だった。開店当時のメニューを見て、斬新さに驚いたという永山さん。「コンソメやエスカルゴ、牛ホホ肉の煮込みなど伝統的な料理でも、『もし飯田が生きていたら』と想像しながらアレンジを加えています」。

モダンかつクラシックな雰囲気演出するという新店では、席数はこれまでと同じ80席ながら、カトラリーや音響、採光にもこだわり、ゆったりと食事を楽しんでもらう工夫が凝らされている。また、ドイツの紅茶をメインにしたカフェタイムや週末限定の贅沢なランチコースなど、これまでになかった試みも始まる。「定型に満足しない」、飯田の遺志でもあり、永山さんの信念でもあるこの言葉通り、「アラスカ」が新しく生まれ変わる。

レストランアラスカ

昭和3年（1928）に梅田橋南に開店したのがルーツ。3年後、竣工した朝日ビルの最上階へ。日本における西洋料理の先駆けとして、多くの人たちの憧れだった。フェスティバルタワーでは、ビル開業と同じ11月28日にオープン。すでに予約で埋まりつつあるという人気ぶり。予約などは☎06-6222-1800（※11月1日前後はつながらない場合あり）



なぜいま「海の大阪」なのか。

水都って、川沿いにおしゃれなカフェがあるだけの都市のことでしょうか？
もちろん水辺の快適な空間は大切ですが、
水都っていうのは生活や産業が海や川と密接につながった都市のこと。
そして大阪はもともと海辺の街として発展してきた都市、
そして実際の大阪は今でもちゃんと海の都市なのです。
水都大阪という言葉が定着してきつつあるなかで、
川だけではない、海の大阪を通して水都の本質に迫ります。

第2回 11/14(水) ※講座内容はP10～12をご覧ください。

「海と陸の接点―内港に残るクレーン」

海と陸の接点は、時代と共に沖へ、沖へ。大正区などの川沿いは、
ちよっと昔の港であり、そこにはまだ多くのクレーンが残っていた。

「ユニークな景色に出合える港」

高速道路の高架橋から眺める港が全てではない。
倉庫ばかりで寂しいと言われるけれど、歩いてみると独自の風景に出合えます。

「港的風景をゆく(2)北村―クブングワ―の記憶」

大正区北村界隈にはかつて、湿地帯の一角に住宅を建て集団生活を送る
沖縄出身者たちがいました。「クブングワ」と呼ばれたこの地の物語を辿ります。
それもまた、この町が港であったことの証左です。

◎概要

時間／7:00PM～8:30PM

会場／淀屋橋odona2階「アイ・スポット」大阪市中央区今橋4-1-1

受講料／無料 定員／30名(当日先着順)

主催／都市大阪創生研究会ワーキンググループ 協力／ナカノシマ大学事務局

お問い合わせ／☎06-6949-1911(事務局)

◎連続講座全体スケジュール

第1回 10/24(水)

「ミックスジュースは港湾ローカルフード」

「船旅の視点で語る海の大阪」

「港的風景をゆく(1)川口―開港地と工場街」

第3回 12/7(金)

「ひとりフェリーの楽しみ方」

「自転車でめぐる港湾エリアの楽しみ方」

「港的風景をゆく(3)築港―めまぐるしく変わる港湾風景」

第4回 12/26(水)

「近世までの埋立と、治水と、生活と」

「お好み焼きは港が作った?」

「港的風景をゆく(4)伝法―消失景としての港」

第5回 2013年 1/16(水)

「近代大阪の港と交通」

「船長から見た大阪港と川」

「港的風景をゆく(5)北加賀屋―産業化遺産とクリエイティブ・ビレッジ」

第6回 2013年 2/8(金)

「あなたにも関係ある貿易の今」

「港に住むということ」

「港的風景をゆく(6)咲洲―港湾風景の現在形」

※上記は現在の予定です。日程は変更しませんが、内容は、講座の進展によって変更する可能性があります。

都市大阪創生研究会では昨年度の活動として、大阪と海の関係を見つめなおし、
生活や産業のなかでの水都大阪を探検してきました。
あまり認識されていないけど大阪はやっぱ海の街なのです。
だからディープな海の物語がたくさんころがっているのです。
その中からとっておきの「海の大阪」を、全6回でお伝えします。
参加費は無料。多数の参加、お待ちしております。

◎平成10年にスタートした都市大阪創生研究会は、行政と民間のパートナーシップによって新しい時代に向けての
都市のリノベーションを実現するため、大阪の未来とてへ至るべき道を考える場として活動を続けています。



連続講座

「海の大阪」

来春、お逢いしましょう。

フ エステイバルタワーの5階、来
年春の再開を待つフェスティバ
ルホールのホワイエである。たつぷり
3層分もとられた吹き抜けの天井には、
LEDのシャンデリアが輝く。赤で統
一されたカーベットに、昔の思い出が
甦った島民も多いのではないだろうか。
ホール内では、今まさに音響調整が
行われている最中だ。こけら落とし公

演は2013年4月10日、イタリアの
名門・フェニーチェ劇場を招く。2
度にわたる火災による被害をものとも
せず、再建され今なお人気を誇る名歌
劇場。そしてこの後にもさまざまなプ
ログラムが用意されている。天から降
り注ぐと言われた音が、再び中之島に
響くまで、あと半年ほど楽しみに待ち
ましょう。



(左から)1階のホール正面入口の大階段。／ホワイエに面した客席への扉。ここにもレンガが。／大階段奥のエントランスホワイエ。カーベットとシャンデリアで期待感が高まる。

11／14 第2回「海の大阪講座」に向けて

海と陸の接点——内港に残るクレーン

接点を探して小舟に乗った。

海と陸が出会う所は、どうなっているのか。この答えを探して、3人は小舟に乗った。



海と陸の接点といえは港、港といえば天保山や南港が思い浮かぶであろう。しかし実際は、もつと内陸から港は始まっている。例えば、中央

卸売市場の対岸や、JR大正駅の付近も、すでに臨港地区——土地利用計画という「港」となっているのである。これら内陸の港には、静かな岸壁と、個性豊かなクレーンがあつた。

大阪独自の風景、川沿いのクレーン。

昭和の初めから産業都市として栄えた大阪。それを支えたのは、内陸にある川沿いの港であり、クレーン達であつた。実はクレーンは160基もある。海から大阪を訪れたという。海から川へ進めば、必ずクレーンが我々を迎えてくれるのである。なかには動かな

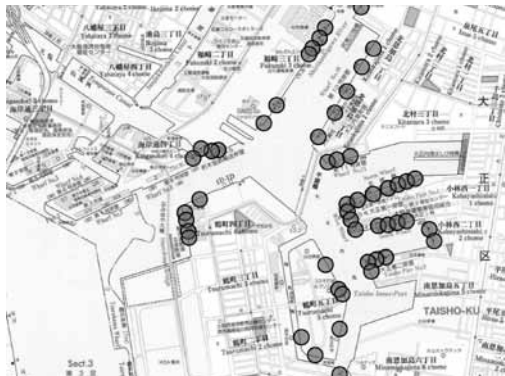


くもあるが、なにはともあれ、川沿いのクレーンは大阪独自の風景なのであり、海と陸の接点そのものである。

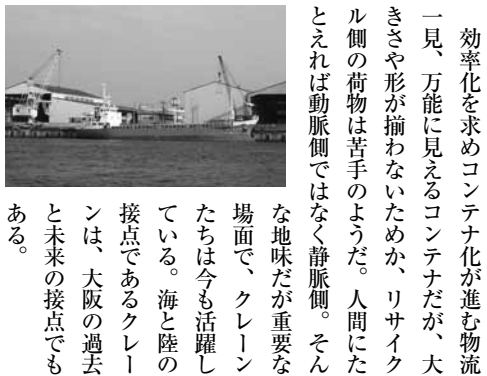
オーナミ鶴町事業所を訪れて。

クレーンをお持ちのオーナミ株式会社を訪問させていただいた。オーナミは、鋼材の倉庫業を営みながら、船に古紙を積む仕事もされている。鋼材がトラック輸送となつてしまつた現在でも、大きくて、重くて、安価な古紙の輸送には、まだまだ船が良いとのこと。隣の大王製紙の倉庫に集められた古紙を、大王製紙の船「エリエール号」に積み、愛媛県の三島工場へ送っている。

大王製紙では現在、紙全体の67%に古紙を利用しており、これは業界の平均を上回る値とのこと。これもオーナミのクレーンがあつてこそ。かなり古いクレーンだが、現在の環境を護り、未来の環境を創造することに役立って



いるのである。



効率化を求めコンテナ化が進む物流。一見、万能に見えるコンテナだが、大きさや形が揃わないためか、リサイクル側の荷物は苦手のようだ。人間にたとえれば動脈側ではなく静脈側。そんな地味だが重要な場面で、クレーンたちは今も活躍している。海と陸の接点であるクレーンは、大阪の過去と未来の接点でもある。

11／14 第2回「海の大阪講座」に向けて

ユニークな景色に出合える港。

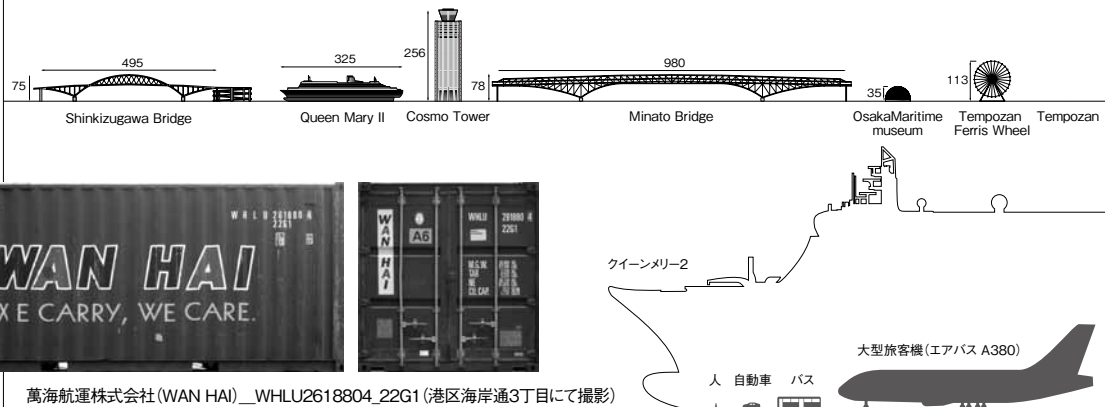
「非ヒューマンスケール」能天気なほど巨大な建造物。

私たちが普段利用する建物は、人間の大きさにあわせて作られている。しかし、「港」では、海（自然）や大量貨物などを相手にするため、巨大なスケールの建造物が求められる。だから、異様な光景によく出会う。窓のない壁面が続く巨大倉庫や、スケール感が狂いそうな巨大な橋脚、次の交差点まで徒歩5分以上もかかる大きな街区。

しかし、人は古来より、ピラミッドやバベルの塔などスケールを逸脱する巨大建造物に強い憧れを抱き、またそれに合うと自然とわき起こる感動すらある。大阪港の街並みを「倉庫ばかり・寂しい」と言う人がいるが、能天気なほど大きなスケールに着目すると、感動を覚える風景と出合える。

まるで海に浮かぶ高層ホテル。

一つ例を挙げるなら、2011年に初入港した世界最大級の豪華客船「クイーンメリー2」。大関門を通過し入港する光景は、まるで海面を移動する巨大高層ホテル（約62m、20階程度の高さ）。船が近づくにつれ集まった



萬海航運株式会社 (WAN HAI) | WHLU2618804_22G1 (港区海岸通3丁目で撮影)

見物人からは大きな歓声や笑い声すらこぼれた。それもそのはず、その巨大さ故、横浜ベイブリッジ下を通過できない。「とてつもない大スケール」は寄港先に大阪港が選ばれた理由の1つにもなっているのだ。

大阪港はそうした巨大な船舶にも対応できるため、このような感動を覚える跳び抜けた巨大景観が数々ある。そんな普段見慣れない景色をぜひ探しに行きませんか。

「旅するコンテナ」

無骨な積み木景観の美しさ。

コンテナ埠頭の無造作に積層されたカラフルなコンテナ。合理化の末、スチールにペンキを塗装しただけの簡素な作りは無骨極まりないが、炎天下や雨風にさらされながらも世界各地を神出鬼没に旅するその外装は、哀愁すら感じさせる。

以前は、自社単独運航航路が主流で、同一色のコンテナを積載する船も多かった。しかし、昨今は海運会社が提携を組む事が多く、他社のコンテナもたくさん積むようになり、港の荷役エリアに積層されるカラフルなコンテナが

モザイク模様を作り出している。なぜ、コンテナは迷子にならないのか？

そんなカラフルで大量に積まれたコンテナだが、なぜ、迷子にならないのか？ それは、コンテナの側面にペイントされたPreboxコード（4桁）とコンテナ番号（11桁）によつて個別管理され、世界中どこにいても迷子にならないのだ。国際フォーマットに従いシステムティックに管理された機能美とも言えよう。

コンテナ埠頭の夜景が美しい。

大阪港に入港できる最大級のコンテナ船「EVER ULTRA5652TEU」。毎週末、大きな汽笛を鳴らしながら大関門を通過し入港する。こうした大型コンテナ船が入港した日は、夜遅くまでコンテナ埠頭を煌々と明かりが灯り、夜の港を美しく演出する。大量物流をスマートに捌く様子は、大都市圏・関西の私たちの生活を支える縁の下の力持ちなのだ。

私たちの知らないところで活躍する港。それを見るには、まずはコンテナに注目すると良いかもしれない。

大正区の発展と 沖縄出身者たち。

大正区北村にある喫茶店で、こんな話を聞いた。

「妻と娘が喫茶店をしたいというので、30年以上前にこの店を買った。物件を見に来たのは雨の夜で、交番が前にあったので安心したが、後日来てみると交番は無人で、店の数軒裏からはトラックが立ち並んでいた。あたりは土地が低くなっていて水はけが悪く、長靴を履かないと入れなかった。ここには多くの沖縄出身者が住んでいた」

大阪府西南部の湾岸沿いにあたり水運至便であった大正区は、明治から大正にかけて工業地帯として発展し、製材所、製鉄所、レンガ工場、造船所、紡績工場などが集積していた。これらの産業に従事した人の多くは、沖縄出身者であった。

1920年代、沖縄は主要産品であった黒糖の暴落により「ソテツ地獄」と呼ばれる経済困窮状態に陥り、多くの人たちが海外や本土に移り住んだ。中でも航路があり、非熟練工としての就労機会に恵まれていた大阪には出稼ぎが集中した。

言葉や習慣の違いからくる差別や偏見などもあり、沖縄出身者たちの生活は心安いものではなく、彼らは肩を寄せ合うように同郷コミュニティを形成していった。中には家を持てず、湿地帯の一角にバラックを建てて集団生活を送る人々もいた。彼らはこの湿地帯のことを、クブングワー(くぼ地)と呼んでいた。



戦後の区画整理。

かつてクブングワーに暮らした女性のコメントが、97年の朝日新聞で紹介されている。

「沖縄から出てくる知り合いのため、勝手に家をつくるもんもおったよ。製材所はいっぱいあるから材料には不自由せん。役所が休みになる日曜日に『それ』つて一日で建てるんや。住み始めたら、もう追い出すわけにはいかんし。何回も手伝ったなあ」

もともと土地が低い上に地盤沈下が進み、台風被害、戦災が相次いだ大正区では、戦後に土地区画整理が進められたが、クブングワーでは行き場のない住民たちが立ち退きに抵抗し続けた。最終的にバラックが撤去されたのは70年代後半。住民は市営住宅に移され、跡地には高層住宅、テニスコートなどが建設された。現在、大正区の人口6万

劇団「維新派」は1999年、大阪・南港野外特設劇場において、クブングワーを描いた舞台劇「水街」(作・演出:松本雄吉)を上演。同作品は翌年アデレードでも上演されている。



8000人のうち、4分の1が沖縄出身者だといわれている。

立ち呑み屋で聞こえた 沖縄なまりの声。

北村には、60年以上続く立ち呑み屋がある。かつてはクブングワーで営業していたという。僕が行った時には、近くで働く女性たちがビールジョッキを片手に盛り上がりつつあった。しばらくすると、後から来た同じ職場の男性が、彼女たちに「よお」と声をかけてカウンターへ。「あなた、あっちへ行かんの？」と店主に尋ねられた男性は、「あんなところ入ったら、母ちゃんに怒られるさあ」と沖縄なまりで照れながら答えていた。

主催/朝日新聞社

言葉ほぐし

哲学者で大谷大学教授の
鷺田清一さんをホスト役に、
芸能、スポーツ、ジャーナリズムなど
様々な分野で活躍する
関西ゆかりの女性たちを
お招きします。



哲学者
鷺田清一さんの
対談シリーズ④

第4回ゲスト 津村記久子さん(作家)

テーマ「働く」ということ



KIKUKO TSUMURA

作家。1978年大阪府生まれ。大谷大学卒。2000年4月から土木会社などへの勤務と失業を経験し現在は会社勤務。05年「マンイーター」(「君は永遠にそいつより若い」に改題)で太宰治賞、08年「ミュージック・プレス・ユー」で野間文芸新人賞、09年「ポストクライムの舟」で芥川賞、11年「ワークス・ダイジェスト」で織田作之助賞をそれぞれ受賞。同世代の働く女性の日常を描いた作品が多い。

未来が見えない、不透明な時代を生きる私たち。さまざまな環境の変化の中、ともすればこころがくじけそうになりがちです。この対談では、「気になる言葉」「ひっかかる言葉」をとりあげます。その「言葉」をほぐすことで時代をほぐし、困難を乗り越えていく明日の元気につなげていきたいと思います。

シリーズ4回目のゲストは作家の津村記久子さん。テーマは、「働く」ということ。津村さんは会社勤めの経験、同僚たちとの交わりを通して、決して希望に満たない「いま」を描いてこられました。その作品世界をいかに造り出したかをもとに、「働く」ということについて語り合ってください。

●これまでの「言葉ほぐし」ゲスト



第1回
(2012年5月26日)
麻生祐未さん
(女優)
テーマ
「演じ分ける」



第2回
(2012年6月15日)
増田明美さん
(スポーツジャーナリスト)
テーマ
「がまん」



第3回
(2012年10月27日)
最相葉月さん
(ノンフィクションライター)
テーマ
「『わかる』ということ」

定員
200名
(無料)

日時 2012年11月24日(土)
開場 16:30

開演 17:00(終了予定19:00)

※会場へは聴講券をご持参ください。

場所 大阪大学中之島センター 佐治敬三メモリアルホール
(大阪府北区堂島浜2丁目1-25)

申し込み方法

参加ご希望の方は、名前(1枚に1人)、郵便番号、住所、年齢、電話番号を記入し、はがき(〒530-8211(住所不要))か、メール(sq-sybox@asahi.com)で、朝日新聞社関西スクエア「対談シリーズ・言葉ほぐし④」係へ

[11月9日(金) 必着]

※応募多数の場合は抽選し、聴講券の発送で発表にかえさせていただきます。※お寄せいただいた個人情報は聴講券の発送のみに使用させていただきます。

◎お問い合わせ/朝日新聞朝日21関西スクエア

☎06-6201-8450(平日10時~17時)





2012年12月講座

「新しいランドマークをつくる ～中之島フェスティバルタワー建設秘話～」

講師／岡橋 稔(竹中工務店大阪本店)

大注目ビルの
裏側は…?

◎今月の授業

【最新建築】



岡橋 稔
竹中工務店大阪本店作
業所工事課長。中之島フ
ェスティバルタワーのプロ
ジェクトに、発足当時から
関わり、現場でも陣頭指揮
に当たった。「月刊島民」
の取材でも何度もお世話
になり、愛のこもった建築
解説をご披露いただいた。

「新しいランドマークをつくる ～中之島フェスティバルタワー建設秘話～」

日時／12月12日(水)
7:00PM～8:30PM(開場6:30PM～)
会場／中之島フェスティバルタワー内会議室
受講料／1,000円 定員／100名
主催／ナカノシマ大学
協力／朝日新聞社 竹中工務店

お名前・ご住所・電話番号を明記の上、下記までハガキ、ファックス、もしくはHP内の応募フォームからお申し込みください。ハガキ、ファックスについては、複数名でご参加希望の場合は、人数分の必要事項を明記してください。ハガキ、ファックスでお申し込みの方は、講座名を必ずお書き添え下さい。

〒530-0004 大阪市北区堂島浜2-1-29 古河大阪ビル4階
「ナカノシマ大学12月講座」受付係 FAX.06-4799-1341

※先着順で受付を確認し次第、順次、受講票をお送りします。
※定員に達した時点で申し込みは締め切らせていただきます。

ナカノシマ大学の最新情報は

<http://www.nakanoshima-univ.com>

ケータイからは
こちら!→



お問い合わせ ☎06-4799-1340
(ナカノシマ大学事務局)

ナカノシマニア

取材文／松本創(本誌)

サ

ントリーといえは日本の洋酒文
化の草分けであり、広告や出版・
文化事業の先駆けであり、何より堂島
浜に本社を構える島民企業であり…と
いうわけで、本誌にもたびたび登場す
るが、その企業イメージを一身に体现
したのが創業者の島井信治郎と、次男
で二代目社長の佐治敬三
であった。とりわけ佐治
はシマとの縁が深い。そ
の評伝が出版され、話題
を呼んでいる。

著者の小玉武さん(左
写真)は昭和37年(19
62)、また「寿屋」だっ
た当時のサントリーに入社。伝説のP
R誌『洋酒天国』の編集をはじめ、一
貫して広報宣伝や文化事業畑を歩いた。
「佐治さんが社長に就任した年に入
社し、亡くなられた数カ月後に定年にな
った。入社後の最終面接は、当時本社
のあった新朝日ビルでした」
というから、佐治が築いたサントリ
ー文化を間近でまると見てきた生き
証人である。綿密な資料調査と取材に
加え、自身の体験も踏まえて書かれた
評伝は、中之島関連に限っても興味深
いエピソードがいくつも並ぶ。

島民企業人の矜持を描く 本格評伝が出た。

佐治は、中之島にあった大阪大学理
学部で学んだ化学の徒だった。社業を
継ぐため研究者の夢は断念したが、入
社直後、父に「食品化学研究所」の設
立を進言する。「製品開発や社の発展
には基礎研究が重要になる」と考えた
からだ。洩る父を説得し、阪大の恩師
の助けて大学の一角に小さな研究所を
開設したのは終戦の半年後。今や、数
百人を擁する「サントリー生物有機化
学研究所」の前身である。

その開設当初を支えたのが、やは
り阪大理学部の助手だった牧洋
子。詩人でもあり、後に開高健と結婚
する。彼女が編集に携わった家庭向け
科学雑誌「ホームサイエンス」の創刊
も、佐治の発案だった。「うちはウイ
スキー屋でっせ! 出版社やおまへん
で!」と反対する父を、佐治は「これ
はええ雑誌です!」と押し切ったとい
う。この雑誌が志向した「生活文化」
路線が、やがて社の方向性を決めるこ
とになる。後の『洋酒天国』創刊も、
そこに開高や山口瞳という稀有な才能
が集まったのも、ここに源流があるのだ。
こうして眺めてみると、サントリー
文化は中之島の土壌を養分に、大阪で
大きく花開いたのだ、と言えそうだ。
「佐治さんはひと言で言えば、人たらし
でした。大阪という文化を、身体
で、生き様で表現した人」
佐治の足跡が刻まれた中之島の風景
を小玉さんは感慨深げに見下ろした。



『佐治敬三
—夢、大きく
膨らませてみなはれ—
小玉武著
(ミネルヴァ書房・2,940円)』

『「洋酒天国」とその時代』で織田作之助賞を受賞した著者が、膨大な資料と証言で「創業者的二代目」の生涯をたどる本格評伝。佐治敬三(1919～1999)を育んだ船場の商人の気風と流儀、阪神間の郊外文化、理系経営者としての論理やひらめき、財界活動や文化貢献などを通して、「サービス精神旺盛な大阪人というだけでなく、実は内省的で晦渋なモダニストでもあった」という人柄を多面的に描いている。ビール事業での苦戦や「東北熊襲発言」などの舌禍事件も余すところなく。

毎回、京阪沿線にまつわる歴史や文化を掘り下げて紹介する、大人気の京阪文化フォーラム。今回は「信仰とお笑いの狭間に落語」と題し、宗教と落語の密接な関係を取り上げる。

落語はもともと住職がお寺でする「お説教」が源流であると言われる。それもあって

か、仏教や神道の教えと深く結びついた落語のネタは数多い。フォーラムでは、まず宗教

や信仰に関わる落語3席が楽しめる。今やノリにノッている笑福亭福笑さんのほか、その弟子の笑福亭たまさん、そして林家染雀さんと、落語好きなら「これは贅沢！」と唸る豪華なメンバーが揃う。

そして第2部には、『大阪の神さん仏さん』ですっかりおなじみ、釈徹宗先生と高島幸次先生も登場。福笑さんを迎えて3人で、落語と神さん・仏さんの「おもしろい関係」が語られる。一見、宗教や信仰とは関わりのないようなネタでも、実はお経の内容と関わっていたりすることがある。新しい落語の楽しみ方を知る良い機会になること間違いなし。(大迫力・本誌)

第30回 京阪・文化フォーラム「信仰とお笑いの狭間に落語」
日時／11月17日(土)2:00PM～4:30PM(予定)
会場／龍谷大学 顕真館 定員／500名 参加費／1,000円
申込方法／往復はがきに「京阪・文化フォーラム参加希望」と記入の上、郵便番号・住所・氏名(ふりがな)・年齢・電話番号・参加人数(2名まで)を明記し(返信用には宛名を記入)、郵送(応募者多数の場合は抽選)。〒540-6591 マーチンダイスビル内郵便局 私書箱35号 京阪電車 宣伝担当「京阪・文化フォーラム」係 応募締切／11月6日(火)の消印まで有効 ※「おけいはん.ねっと」(https://www.okeihan.net/forum/)からも応募可能。
問い合わせ／ ☎06-6944-2525

都会の真ん中では珍しく水と緑に囲まれた中之島では、ほっとする風景によく出会う。「Nakanoshima-style.com」フォトコンテストでは、「やすらぎのまち 中之島」をテーマに、そんな心安らぐ風景を納めた写真を募集した。

第7回 Nakanoshima-style.com フォトコンテスト
応募期間／11月25日(日)まで
応募方法／下記メールアドレス宛に写真データを添付して送信(※応募は一人につき5点まで)。送信の際は、写真のテーマ、撮影場所(簡単に)、名前(ニックネーム可)、賞品の送り先(郵便番号、住所、氏名、電話番号)を明記。データ送付先／oubo@nakanoshima-style.com
◎写真データについての注意
・携帯電話メールから応募可能
・ファイル形式 JPEG、GIF等
・ファイルサイズ 2MBまで
・郵送での応募は不可



〈応募用QRコード〉



中之島が舞台の
写真コンテスト
作品を募集中!

昨年度の優秀作品
上／「光の柱」撮影者:アトム 下／「ダブルダック!」撮影者:ゆうこりん



中之島の川沿いの物件など、個性ある不動産物件ばかりを扱う「みんなの不動産」の末村巧さんが、また新しい試みをスタート。「古ビル再生博覧会」と題し、年代を経て良い具合に歳を重ねたビルの魅力を、さまざまな方法で「使う」ことによって提案する。

古ビルの使い方を
丸ごと展示する博覧会!

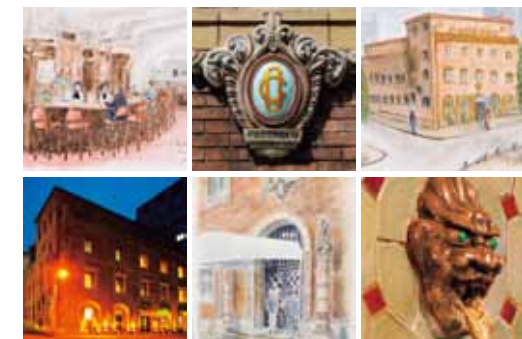
今回の会場となる

のは坪地筋沿いに建つOSK(大阪繊維共同販売所)ビル。例えば、廊下ではビルから発見された壊れたイスを修繕して展示、3階では古本市や「こ



い思いにリノベーションを施した空間も。実際にビルを使っている様子を見てもうこのにより、ビルの新たな姿をイメージしてもらえよう」と末村さん。展示の中心身はも

古ビル再生博覧会
期間／11月4日(日)まで 時間／11:00AM～7:00PM
会場／OSK(大阪繊維共同販売所)ビル(大阪市中央区久太郎町3-1-22)
入場料／無料(IFDA日本支部主催の4・5階の展示1,000円)
問い合わせ／みんなの不動産 ☎06-6314-6408
http://minfudo.com/
http://www.ifdajapan.com/activities/



関西で最も古い会員制紳士倶楽部である大阪倶楽部が、大正元年(1912)の創立から今年で100周年を迎える。それを記念して、倶楽部の会員による写真や絵画をデザインした切手シートとハガキを制作。どの作品も大阪倶楽部を題材にしている。大阪を代表する近代建築だけあって、どれもなかなか渋い仕上がりだ。

御堂筋のビルを舞台に
コンサートや落語も
コンサートや落語も

今月もクラシックコンサートやペーパークラフト教室、ピラティスに落語など、多くのイベントが予定されている。御堂筋を拠点とする企業が開催するため、オフィスビルの内外で行われるイベントが多

ハガキのセットを100名の方にプレゼント。切手シートは写真と絵画がそれぞれ種類ずつ入った10枚つづり、ハガキは5種類がセットになっている。希望者は、応募要領に沿ってお申し込みを。(大迫力・本誌)



御堂筋 AUTUMN GARALLY 2012
(主なイベント)

●まちかどコンサート&花と緑
11月1日(木)
0:10PM～0:55PM
@銀泉備後町ビル前

●まちかどコンサート&テラス
11月8日(木)・15日(木)
11:30AM～1:00PM
(コンサート0:10PM～0:55PM)
@京阪神御堂筋ビル前

●朝活@御堂筋
「ローズウィンドウ・ワークショップ」
11月6日(火)

7:40AM～8:40AM
@大阪ガスビル1階フラムテラス

「ピラティスをはじめよう」
11月13日(火)

7:30AM～8:30AM
@大阪ガスビル1階フラムテラス
※女性限定

●第15回御堂筋放談
「大阪の笑い、国境を越える」
11月8日(木) 開場5:45PM
ウェルカム演奏6:00PM～6:30PM
放談6:30PM～7:30PM

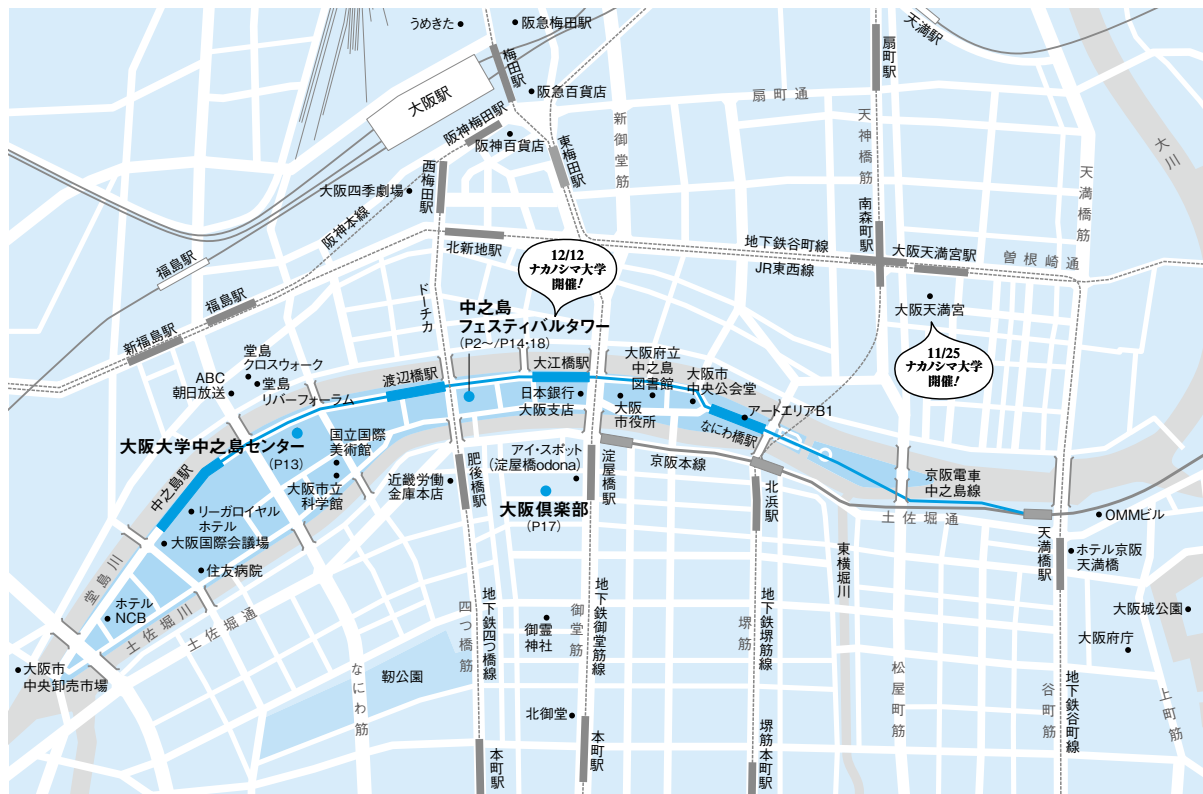
@大阪ガス御堂筋東ビル3階ホール
講師:桂小春園治

●落語バンク@御堂筋
11月20日(火)7:30PM～
@りそな銀行
御堂筋ビジネスソリューションプラザ
寄付金1,000円
出演:桂小春園治ほか
http://www.midosuji.biz/

申し込み方法／ハガキに郵便番号・住所・氏名・電話番号を記入して応募。11月30日(金)の消印有効。応募者多数の場合は抽選の上、当選者のみに送付します。
〒541-0042
大阪市中央区今橋4-4-11
大阪倶楽部「記念ハガキ&切手プレゼント係」事務局
問い合わせ／大阪倶楽部
☎06-6231-8361(10:00AM～5:30PM)

大「島民」MAP

橋を渡って通う人、川を見ながら帰る人、
みんな「島民」です！



『月刊島民』はここでもらえます。

●京阪電車関連 京阪電車主要駅／京阪シティモール／京阪モール／デリスタ天満橋店／ホテル京阪天満橋／ホテル京阪京橋
●大阪市北区・中央区・福島区 〔書店〕旭屋書店 梅田地下街店／旭屋書店 堂島地下街店／カベラ書店／紀伊国屋書店 本町店／ジュンク堂書店 大阪本店／ジュンク堂書店 梅田ヒルトンプラザ店／ジュンク堂書店 天満橋店／MARUZEN&ジュンク堂書店 梅田店／スタンダードブックストア／天牛亭書店 大江橋店／ブックファースト 梅田店／ブックファースト 淀屋橋店／文教堂書店 淀屋橋店／隆祥館書店
〔公共施設・大学関連施設など〕アイスポット／朝日カルチャーセンター／味の素 食のライブラリー／ABC朝日放送／大阪企業家ミュージアム／大阪倶楽部／大阪国際会議場／大阪市中央公会堂／大阪市立中央図書館／大阪市役所市民情報プラザ／大阪城天守閣／大阪商工会議所／大阪大学中之島センター／大阪21世紀協会／大阪府立中之島図書館／大阪フィルハーモニー会館／大阪ボランティア協会／大阪歴史博物館／追手門学院 大阪城スクエア／関西学院大学 大阪梅田キャンパス／慶應大阪リバーサイドキャンパス／国立国際美術館／CITY NAIL'Sインターナショナルスクール／市立住まい情報センター／中央電気倶楽部／ホテルNCB／メビック福町
〔店舗・医院など〕アリアスカ マーブルトレ／アンドール 本町本店／上町貸自転車／Ultra 2nd／江戸前鰻料理 志津可／天満橋鍼灸整骨院／MJB珈琲店／大西洋服店／OOO(オー)／カセッタ／喫茶カンターロ／喫茶SAWA／グランドコート中之島／黒門さかえ／コモカフェ／サトウ花店 中之島本店／ザ・メロディ／じろう亭／Girond's JR／心斎橋山田兄弟歯科／住友病院／セブンイレブン大阪証券取引所店／タビエスタイル／ティーハウスムジカ／たがわ鍼灸整骨院／東郷歯科医院／NAKAGAWA1948 淀屋橋店／ナンジャ／バストラーレ／花かつ／BAR THE TIME 天神／平岡珈琲店／ビルマニアカフェ／フレイムハウス／ミニジロー／宮崎歯科／やきとり ばかや／吉田理容所／ラックカーニャ／LES LESTON
●大阪市内その他 〔書店〕伊勢屋書店／大阪書店／紀伊国屋書店 京橋店／なんばミヤタ／福島書店／柳々堂／ループル書店 〔公共施設・大学関連施設など〕大阪市社会福祉研修・情報センター／大阪市立図書館 〔店舗・医院など〕あじさい／アートアンドクラフト／欧風食堂 ミリパール／大阪市信用金庫 江戸堀支店／御船かもめ／Cato Bookshop and cafe／写真とプリント社／鳥かごキッチン／ネイルサロン スワナナ／バルビコ／ホステル64オオサカ／MANGUEIRA／Loop A
●大阪府下 旭屋書店 京阪守口店／学運堂 フレスト店／Books 呼文堂／水嶋書房 くずはモール店／水嶋書房 くずは駅店／大阪狭山市立図書館／大阪大学企画広報・学芸連携事務局／大阪大学 21世紀懐徳堂／大阪大学本部／寝屋川市役所／摂南大学 地域連携センター／郵政考古学会／ゆったりんこ
●大阪府以外 ジュンク堂書店 西宮店／水嶋書房 丹波橋店／伊丹市文化振興財団／大手通リストリートギャラリー 街・発信／納屋工房／タバーン・シンパソン／百練／奈良県立図書館情報館

◎バックナンバーお譲りします。

バックナンバーをご希望の方には1冊100円(手数料)でお譲りしています。なお、品切れの号もありますが、予めご了承ください。お問い合わせは下記の電話番号まで。

◎定期購読も受け付け中です。

毎月確実に読みたい方は、ぜひお申し込みください。まずは下記の電話番号までお問い合わせ下さい。

次号予告 中之島キネマ通り

11月3日に公開された映画『黄金を抱いて翔べ』は、中之島が重要な舞台に。
それを記念して、中之島と映画のつながりをひもといてみる。

●『月刊島民』vol.53は2012年12月1日発行です！

11/15には
中之島フェスティバルタワー
別冊を限定配付！

編集・発行人／江 弘毅(編集集団140B)
編集・発行／月刊島民プレス
若狭健作 網本武雄(株式会社 地域環境計画研究所)
松本 創 大迫 力(編集集団140B)
〒530-0004 大阪市北区堂島浜2-1-29 古河大阪ビル4階
Tel 06-4799-1340 Fax 06-4799-1341
制作進行／堀西 賢(ALEGRESOL)
デザイン／山崎慎太郎
表紙イラスト／奈路道程
印刷／佐川印刷株式会社

祝祭に包まれて

—わたしのフェスティバルホール—

取材・文／松本 創(本誌)

「初めて観たのはオペラのサロメ」。強烈でした。クリステル・ゴルツのドラマチックなソプラノ。井戸の底から朗々と響くヨーゼフ・メッテルニヒのバリトン。当時は字幕もなく、細かいニュアンスは分からない。ただ、声のすごさと生の迫力に圧倒されました。1階の真ん中、H列の席で」

フェスティバルホールの思い出を尋ねると、大阪フィルハーモニー交響楽団の事務局長、鈴木貞治さん(66)は滔々と語り始めた。「東洋初演」と書かれた半世紀前のパンフレットを繰りつつ。昭和37年(1962)の「第5回大阪国際フェスティバル」。鈴木さんは高校1年生だった。

「海外のオーケストラや歌手なんて、年に1組来るかどうかの時代。中学からレコードやラジオでクラシックを聴き始めた私には、フェスはいつか行きたい憧れの場所でした。この時はA席だったので2000円もしたんですよ。お年玉の貯金はたいてね」

しかし学生の身、そう毎回大金は払えない。翌年からは



第5回大阪国際フェスティバルで上演されたオペラ「サロメ」。これが日本初演だった。鈴木さんは、この時のチケットを始め、思い出に残るコンサートのチケットの半券を今も大事にしている。

「天から降る音」を浴びた青春。

第1回
大阪フィルハーモニー交響楽団事務局長
鈴木貞治さん



席のランクを落とした。当時、前から順にA A列、B B列、C C列：と並んでいた2階席。鈴木さんの定位位置はいつしか、P P列に落ち着いた。最後列である。が、音に不満はなかった。

「残響が十分にあって、しかもクリアなのがフェスの良さ。実は一度、アンコールの時に前方のボックス席近く

まで走り出て聴いたことがあるんですよ。でも、音質は後ろで聴く印象と変わらなかった。ホール全体に均一に響いているんですね。これはすごいと思いました」

「天から音が降り注ぐ」とフェスティバルホールが称賛された由縁である。時に力強く、時に優しく降る音を全身に浴びて、鈴木さんは青春を過ごした。

名匠アンドレ・クリュイタンスがバリ音楽院管弦楽団を率いた64年。世界最高峰の音楽祭「バイロイト・ワグナー・フェスティバル」の海外初公演となった67年。大阪万博の第二会場となった70年は、豪華なラインナップに目移りして困るほどだった。

「毎年定位置で聴いてるし、前売り券を求めて、時には徹夜で並んだりするもんだから顔見知りができましてね。コンサートの帰りに「来年は何が聴けるかな」ってワクワクしながら話し合ってたよ」

中でも忘れ難いのは、伝説の巨匠カラヤンとベルリン・フィルが登場した66年。鈴木さんだけでなく、日本音楽史上に残る伝説の公演だった。

「熱のこもった演奏でした。ただダイナミックに盛り上がるだけじゃなくて、いろんな表情を見せてくれて。モーツァルトのディヴェルティメント(嬉遊曲)が、それはそれは美しくてね。クラシック専門誌に『死に際に聴きたい曲は?』と聞かれた時に、これを挙げたぐらいです(笑)」

80年代に入り、鈴木さんはザ・シンフォニーホール(北区大淀南)の設立・運営に関わるようになる。天からの音を浴びるように聴いたあの日々が、人生を決めたことは間違いない。



2013年4月 オープン!

festival hall

www.festivalhall.jp/
提供／株式会社 朝日ビルディング